

コンゴ

作られた部族抗争

■ 武内進一 ■

私が1992年10月に着任してからというもの、コンゴではほとんど絶え間なく政治的な混乱が続いている。これまでに幾度となく、ブラザヴィルの市内を銃弾が飛び交い、砲撃が轟く事態となり、私自身も数度自宅からの避難を余儀なくされた。

この政治的な混乱を一言で表現するなら、「部族抗争」という言葉がふさわしい。対立は与野党間の争いという体裁をとってはいるが、実際のところ、後述するように二つの部族を核とする武力抗争に転化している。そしてコンゴの混乱を見ながら思うのは、これが明らかに「作られた」ものであることだ。これは、政治指導者らによって人為的に「作られた」抗争であり、混乱なのだ。

1 対立の基軸——ニボレックとチェック

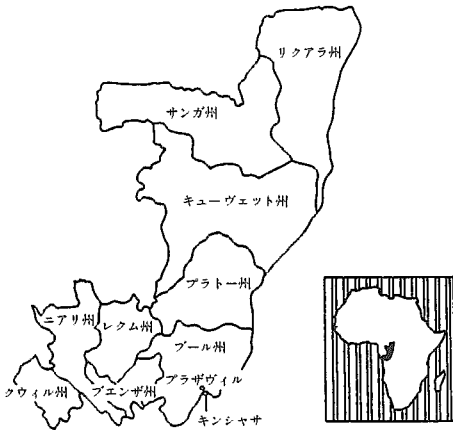
現在のコンゴの部族抗争は、ニボレックとチェックの対立に集約できる。もっとも、ニボレックにせよチェックにせよ、特定の部族を指す言葉ではない。昨年以降の対立の中で頻繁に使われるようになってきた造語である。

ニボレック(Nibolek)とは、ニアリ、ブエンザ、レクム州の出身者を指す。この中南部の三州はP・リスーバ現大統領および彼の出身母体であり現在の最大与党であるUPADS(パンアフリカ社会民主

義連合)に対する支持が圧倒的なことで知られる。昨年行なわれた下院選挙では、この三州選出の議員は全員与党連合である大統領派運動(Mouvance Présidentielle)に属する候補者であった(うち1名を除き全員UPADS所属)。リスーバ大統領自身は、ニアリ州北部、ガボンとの国境付近に居住する小規模な部族ンザビの出身といわれるが、彼はバベンベなど中南部三州に居住する諸部族(より正確にはそれらの部族を代表する政治家たち)の支持取りつけに成功し、その結果、これら三州はリスーバおよびUPADS支持で固まった。それに対して反大統領派は、彼らをニボレックと呼び、敵対視した。したがって、これは中立的な言葉ではない。蔑称である。

一方、チェック(Tchek)は、プール州出身者を指す蔑称である。プール州は、野党第一党のMCDDI(民主主義と統合的発展のためのコンゴ人運動)とその指導者B・コレラに対する支持がきわめて強い。プール州に多数居住する部族バラリヤバスンディがMCDDIの支持基盤になっているためである。チェックという言葉の語源は不明だが、1993年に入って大統領派と反大統領派の抗争が激化するにつれ、「ニボレック」側が、相手側の蔑称として「チェック」を創出したようだ。

ニボレックにせよ、チェックにせよ、それが表



面的に意味するところは特定の部族ではなく、ある州に居住する者、ということである。事実、中南部三州もプール州も多様な部族が居住している。

Atlas de la République Populaire du Congo (Edition Jeune Afrique, 1977年)によれば、「ニボレック」側にあたる、ニアリ、プエンザ、レカム州の領域内には、その南部にバベンバ、バカンバ、バクニなどのコンゴ諸部族が、中部や北部にはバテケグループに属するバテケ・ラリやリスーバの出身部族であるンザビなどが居住している。一方、「チェック」側にあたるプール州内には、その西部にバラリ、バスンディ、バコンゴなどのやはりコンゴ諸部族が、東北部にはティオなどのバテケ諸部族が居住している。

こうした多様性にもかかわらず先の「蔑称」がリアリティを持つのは、上述のように支持政党がそれらの州を単位として明確に分かれることに加え、抗争の核となる部族が存在するためである。中南部三州ではバベンバ、プール州ではバラリがそれにあたる。このいずれもコンゴ諸部族に属する二つの集団は、自らの利益を代表する強力な政治家を持ち、彼らが作り上げた民兵組織を有するという点で共通している。

バベンバはリスーバ大統領を支える上で中心的

な役割を演じている。リスーバが中南部三州の支持をまとめて大統領に当選するに際して、C・ムクエクエをはじめとするバベンベの有力政治家4名の協力を取りつけたことが決定的であった。ムクエクエは現在、与党連合総裁の座についている。

またバベンベは、「オーブヴィロワ」(Aubevillois)と呼ばれる民兵組織を有する。民兵がバベンベの若者で構成され、彼らがオーブヴィルというバベンベの居住地で訓練を受けたとの逸話から、このように呼ばれるようになった。

一方、バラリはMCDDI議長であるB・コレラ支持で結束している。興味深いことに、コレラ自身はバラリではなく、パテケの出身だといわれている。パテケはかつて現在のブラザヴィール市にあたる地域にも多数居住していたが、その後の移住により、今日その中心的な居住地域はより北方へ移っている。しかし、ブラザヴィール市付近に留まり、その後ここに移住してきたバラリとの間に親密な関係を作り上げたパテケもいた。コレラもそうしたパテケの一人である。彼は、バラリと同じように彼らの言葉を話し、バラリの中でもコレラがパテケ出身であることを知らない者は多い。

バラリの民兵組織は「ニンジャ」と呼ばれる。なんとも奇妙な名だが、アジア製のビデオなどで紹介されるニンジャは、才知に長け、敵を確実に倒す技術を持った優秀な兵士として、コンゴ人に認識されているのである。ニンジャはやはり昨年以降、ニボレックを標的として、殺人や誘拐、略奪を繰り返してきた。

「ニボレック」という蔑称に込められた意味内容をより詳細に述べるなら、中南部三州出身者であって、バベンベを筆頭とするUPADSの支持者でオーブヴィロワの仲間、ということになり、一方「チェック」の方は、バラリをはじめとするプール州出身でMCDDIを支持するニンジャの仲間、という

ことになる。お互いを蔑称で呼びながら、両者は対立感情を煽ったのである。

2 抗争激化の軌跡

さてここで、リスーバ大統領の選出後、いかなる形でニボレックとチェックの対立が激化し、現在のような抜き差しならぬ事態を迎えたのか、簡単に振り返っておこう。

1992年8月にリスーバが選出された直後、与党連合に参加していたPCT(コンゴ労働党)は、配分された閣僚ポストが少ないことを不満として与党連合から離脱した。その結果、与党連合は下院で過半数を割り、同年10月内閣不信任案が下院で成立してしまった。野党側は、自らの側から首相を選出することを望んだが、リスーバはこれを嫌い、下院解散に打って出た。野党側は猛反発し、野党支持勢力の強いブラザヴィルの各地区ではバリケードが築かれた。さらに、リスーバを翻意させるべく行なわれた野党側のデモに対して軍が発砲し、3名の死者を出した(同年11月)。これが一連の騒乱における最初の死者となった。

死者が出たことにより事態は深刻化したが、モココ参謀長を中心に軍が介入。与野党の政治家を一堂に集めて打開策を検討させ、選挙の延期と挙国一致内閣の組織という妥協を成立させた。このモココ参謀長の行動は国民から広い支持をえた。

1993年5月に実施された下院選挙では、第1回投票で与党連合が過半数獲得まであと1議席と迫り、勝利をほぼ決定づけた。これに対して野党側は選挙で不正行為があったと主張し、やり直しを

要求して第2回投票への参加を拒んだ。結局第2回投票は野党側の反対を押し切って実施されたが、野党側は再びバリケードを構築し、対決姿勢を強めた。6月に成立したヨンビ・オバンゴ内閣は、バリケードを強制的に撤去する強攻策に出たことから、事態は一気に緊迫。ブラザヴィル各所で銃撃戦が展開する様相となった。ニンジャたちが、ブラザヴィルのバコンゴ、マケレケレといった自分たちの勢力が強い地区で「ニボレック」を攻撃し、彼らを追い出したのはこの時である。この騒乱は1カ月以上続き、数十名の死者を出したが、ガボンやフランスなどの仲介により、8月に入って与野党間で妥協が成立。第2回投票についてはやり直し、さらに第1回投票の結果についてはフランスやECの代表からなる国際的な司法団が再検討することが定められた。

第2回投票は10月に無事行なわれ、第1回投票の再検討を残すのみとなったが、11月以降事態は急速に悪化する。野党側が無許可で設置したラジオ局(6月以降野党側は国営放送から完全に閉め出されていた)に対して、政府は過剰とも思える弾圧策を講じ、軍を出動させてバコンゴにあるコレラの自宅を砲撃しラジオ局を破壊した。これに対して野党側は民兵を駆使して対抗。大統領派の人々を誘拐、殺害するなどのテロ行為に走った。

この時は11月の末になってコレラが支持者に平穏に戻るよう呼びかけ、事態はいったん収拾した。しかし、12月に入ると今度は、ブラザヴィルのキンスンディ、ンフィルといった地区で与党側の民兵が「チェック」に対して、略奪、殺人を始める。この時は、政府が民兵の行為を黙認した節があり、ごく短期間に死者は100名以上に達した。これに反発したプール州の住民は、プール州を通る鉄道の線路を撤去。この結果、12月初旬以降、ブラザヴィルへの鉄道輸送は完全に止まり、小麦粉や米、

* 1992年以降のコンゴの政治情勢については、武内進「コンゴ——不透明な民主化の行方——」(『アジア研ダイジェスト』No.2 1993年6月18日)、も参照のこと。

ガソリンといった生活必需品の搬入を鉄道に頼っているブラザヴィルでは、それらの商品がきわめて入手しにくくなっている。

3 暴力の連鎖と政治家の責任

このようにみえてくると、事態は一つの暴力が新たな暴力を生む形で悪化を続けていることがわかる。暴力の主体は、民兵そして軍である。

民兵組織は、昨年8月の与野党間合意で解散することが確認されたにもかかわらず、一向にその約束は守られていない。大統領派の民兵など、明らかにその後出現したものだ。誰がこうした組織を作り、維持しているのか、答は明らかであろう。いうまでもなく政治家たちである。力の強い政治家が、自ら買い込んだり、あるいは軍から横流しで手にいれた武器を民兵組織に流すのである。軍にしても、昨年7月にモココ参謀長が更迭されて以降、中立的な立場を失い、大統領派の民兵組織とさして違わぬ行動を取るようになってしまった。12月の騒乱では軍が「チェック」に対する略奪行為に荷担した疑いがある。

民兵組織や軍が暴力を行使する背景には、それを利用しようとする人々の、より正確に言えば政治家たちの意図が存在する。彼らは自分の利益のために暴力を行使し、結局それが現在のとめどない部族抗争に発展した。この意味で、リスーバやコレラなど政治指導者たちの責任はきわめて重い。

おわりに

異なる民族や部族の間には、元来ある種の違和感が潜んでいるのかも知れない。しかし、その違和感と、武器を手にとって殺戮を繰り返す、という状況とは全く次元の違うものだ。そうした状況に至るには、必ずどこかで人為的な操作が加えられている。コンゴの例でいえば、民兵組織作りに狂奔し、ニボレックやチェックの殺戮を指示した政治家たちの行動がそれである。現在の部族抗争は、彼らが政治的民主化以降の新しい権力を巡って争う過程で、人為的に生み出されたものなのだ。

1994年に入った現在も、状況に改善はみられない。大規模な衝突こそ発生していないものの、毎晩のようにブラザヴィルのどこかで銃声が響き、鉄道復旧の見通しも立っていない。食糧は不足し、人々の暮らしは日を追って悪化しつつある。はたして希望はあるのだろうか。

それでも希望はあると信じたい。たとえば、出身地にかかわらずお互いの身を案じ、狂信的な民兵の行動を批判して、コンゴの現状に深刻な反省の目を向ける私の助手たち。たとえば、ニンジャについて、自分もバラリ出身だがあんな連中は大嫌いだ、と私に語った村のおばさん。彼らごく普通のコンゴ人の中には、「常識」というこの国が今もっとも必要としているものがまだ十分に存在していると思うのだ。

(たけうち・しんいち／在ブラザヴィル海外派遣員)